

# 北海道の縄文文化

## 【最古の土器と定住】

北海道で最も古い土器は、道東部の大正3遺跡(帯広市)から出土したもので、放射性炭素による年代測定で約14,000年前という年代値が得られています。この土器は乳房状の突起を持つ丸底の形をしており、縄目ではなく、爪形の紋様が施されています。この形と紋様の特徴は本州の土器に共通していることから、初期の縄文文化においては、北海道東部に至るまで本州とほぼ均一の文化要素が広がっていた可能性を示しています。北海道ではこの段階の住居跡はまだ見つかっていませんが、列島の各地ですでに竪穴式住居が出現していたことが知られています。



北海道最古の土器 大正3遺跡(帯広市)

## 【集落と貝塚の形成】

ヤンガー・ドリアスの寒冷期が去った約9,000年前になると、竪穴式住居で構成された集落が各地で確認されるようになります。道東部の八千代A遺跡(帯広市)や道南西部の中野B遺跡(函館市)では多くの竪穴式住居跡がまとまって発掘されるなど、すでにこの時期には恒常的な定住地が形成されていたことが分かっています。



約9,000年前の集落跡 中野B遺跡(函館市)



貝層の堆積状況 北黄金貝塚(伊達市)

その後、6~7千年前に温暖化のピークを迎えると、海水面の上昇と内水面の拡大により漁労が一層発達し、道東部の東釧路貝塚(釧路市)、道南部の北黄金貝塚(伊達市)や入江貝塚(洞爺湖町)のような貝塚を伴う集落が増加し、さらに5,500年前頃から大船遺跡(函館市)のように大型の竪穴式住居が密集した大規模な集落も形成されるようになります。

貝塚とは食料とした貝殻や動物の骨などが堆積した場所で、当時の食料資源や自然環境が反映されたタイムカプセルのようなものです。また、墓地としての機能もあり、当時の社会や精神文化を知る貴重な情報の宝庫となっています。

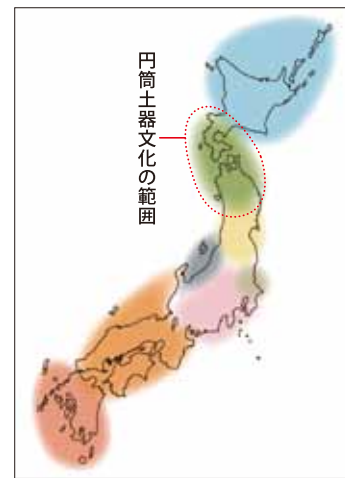
## 【地域文化圏の発達】

縄文文化は北海道から沖縄本島まで日本列島全体に広がっていました。しかし、それは画一的なものではなく、7~8の地域文化圏に分かれていたことが分かっています。今日でも日本の各地にはそれぞれ独自の地域文化が認められますが、縄文時代においても使われる縄文土器の形や紋様が各文化圏単位で異なるなど、一定の範囲で地域文化圏が形成されていたようです。

北海道を地理的にみると、北東部はサハリン島や千島列島などを通じて北方世界と接し、南西部は津軽海峡を挟んで本州と向き合っています。このことから、古来、北海道は北と南の文化が流入し交差する舞台になっていました。また、森林植生の相違も北海道の縄文文化の発展のあり方に影響を与えたと考えられます。落葉広葉樹林が広がる南西部には、ほぼ同じ植生をもつ東北地方を中心に発達し、クリの栽培などを伴ういわゆる「円筒土器文化」が6,000年ほど前から流入し、津軽海峡の両側に南北約500kmに及ぶ広大な文化圏を形成しました。これは他の縄文時代の地域文化圏に比べて広域で安定したものであり、先史時代における文化圏内の価値観の交流を示す顕著な事例として注目されます。



大型の竪穴住居跡 大船遺跡(函館市)



縄文時代の地域文化圏